

レースって良いよね

第12回「夢」の巻

夢を見た。最近見た夢の中で目が覚めてからこれほどはっきり覚えているのも珍しい。

場所は判らないが、屋外のパドックのような所にいる。どうやら何かのレースイベントらしい。見まわすと、うちのチーフメカW部氏がF 3000の走行準備をしている。そもそも、パドックでF 3000さわってるトコから無理があるが、それは置いて…

そのうち何処からともなくドライバーが私の所に来て「クルマできてる?」と聞く。残念な事にドライバーが誰だったかは定かではない。

「は???」と答え、ふと足元を見ると目の前にF 4がなぜか搬入されている。その瞬間、辺りから走行前のレーシング音が聞こえ始めてくる。「フォン、フォン、フォン」……「もうそんな時間かよ!」と私は急いでF 4のエンジンをかける。ピックアップのイイF 3000の音に混じって負けじとF 4を暖機する。シュールな風景ですが、ま、夢ですから。

「大丈夫、あと5分あるから!!」

と叫びながら周囲の誰か知らない若い衆に「ノーズつけて」とか「カウルつけて」とか注文を出す。

「全開チェックするからアクセル踏んで!」

とか、なんか色々やっていてふと前を見るとダンパーの上にノーズをつけた後の工具が置きっぱなしになっている。

「何やってんだよ!!」「もうイイ、俺やるから、ウマ抜いて!!」

なんて現実的な夢なんだろう。実際に起こりそうな、やたらリアルな描写だった。冷静に考えればおかしいところは多々あるが、ま、夢ですから。てんやわんやでグリッドに並んだ私達は「間に合った…」と胸を撫で下ろしつつ、ふと思いつく。

「エアが入ってないーっ!!」

急いでピットに駆け戻り、天井から吊ってあるエアカプラーをガシッと握り締め、また慌ててグリッドに向かう。

え?

グリッドまでホースが届くのかって? 届くんですよ、それが。なんせ夢ですから。しかし、果たしてホースが何メートルあったのかは大きな疑問でもある。

「0.8!!!!!!」

と叫び、そこで目を覚ます。朝方はめっぽう冷えているにも関わらず身体じゅう汗だく。おかしくもそれなりにリアルだった夢の余韻に浸りながら、なんでこんなの見たんだろ? と考えてみる。

なんとなく理由はわかっている。私は今、直接現場に携わる立場にいない。メカニックの仕事を横目で見ながら同時に寂しさや疎外感も感じていた。要は、私は心の中ではきっと最前線にいたいのだろう。

壊れた兵士は極度の恐怖とプレッシャーを受ける事で生きている実感を得るという。帰還兵は戦場に再び帰る……。同じような事なのかもしれない。

「俺は壊れてるのか……」

冬の寒さが身にしみる朝、シャワーを浴びながらそんな事を考えた。